

宜野湾高校の生徒達へ（74）

2021.1.21

11/22日に県立博物館・美術館で「首里城再興に関する公開討論会」が開催され、相対向きか正面向きかで見解が分かれている大龍柱の議論を軸に「県民主体の再興」について討論が行われた。
(沖縄タイムス:11.29より一部引用)。**高良倉吉氏**(琉球大学名誉教授)は、

首里城は琉球の技術や美意識を集約したもの。沖縄戦をかいくぐって再興を願った人たちが無形の文化遺産をたくましく復活させた。有形の文化遺産の象徴的な存在が首里城で、あの丘に建って、**沖縄の独自性**をアピールしてくれる。



西村貞雄氏(琉球大学名誉教授)は、

平成の復元でわかったのが、**大龍柱**が四角柱で、阿形と呷形があり、鎌首をもたげ、とぐろを巻き、仁王像の構えをしている。**アジアの他の地域にはない、首里城正殿独特のもの**だ。(中略) 大龍柱の独自性を知ることによって沖縄の人が沖縄の素晴らしさを知り子どもたちに教えていく。ぜひ再建してほしい。



安里進氏(県立芸大名誉教授)は、

大龍柱は正殿の構造の一部であり、**一番良い資料に基づいて復元**するのが文化財の復元のやり方だ。そのためには資料を総点検しないとイケない。時間がかかる。1877年に正面を向いていたのは事実。新しい事実が出てくれば、検証する作業が必要だ。学会で統一テーマを立ててやるのが大事で、明らかになってからでも向きは十分変更できる。研究者の蓄積・議論を待っていただきたいと思う。**大龍柱は慌てる必要はない。**



友知政樹氏(冲国大教授)は、

首里城再興は日本政府が主導しているが、**沖縄県とウチナーンチュが主導すべき**だと考える。(中略) **かつて主権独立国家だった琉球は武力で廃国された**。その過程で大龍柱は折られたり、つながれたり、向きを変えられ破壊された。ウチナーンチュは**大龍柱の歩んできた姿に自分を映し出しているのではない**か。だから正しい向きにしてほしいのだと思う。



友知氏の「かつて**主権独立国家**」を示すものとして、琉球がアメリカ・フランス・オランダと結んだ**修好条約**を挙げることができる。「武力で廃国された」については「**琉球処分**」(1879年)を指している。これらのことは、沖縄県民として知っておくべき知識だろう。

「大龍柱の歩んできた姿に自分を映し出しているのではないか」の発言も考えさせられる。**大龍柱の向きにこだわるのは、大龍柱の向きの変遷に琉球・沖縄の歴史が反映されているから**なのだ。

後田多敦氏は、大龍柱について次のように述べている(沖縄タイムス:10.7より引用)。

首里城の正殿は象徴的な施設であり、その**正殿の要素を凝縮**したものが**大龍柱**であり、**琉球独特のもの**だという。それなら、そこには琉球の文化や美意識が詰め込まれていることになる。(中略) **前回の復元**で、沖縄社会が**前近代の琉球などを学んだ**とするなら**今度の復元は近代以降の首里城と沖縄の歩みを直視する機会**だと思う。

過去と未来の大龍柱が問いかけているのは、その向きだけではない。



後田多氏の「前回と今度の復元」の違いについては、紙幅の関係上詳しい説明はできないが、同氏は次のように述べている。「折られ、短小化され、向きを変えられた大龍柱は、沖縄の近現代の歩みを象徴しているように思う。誰が折ったのか。誰が向きを変えたのか。その意味は何か。昨年首里城火災は不幸な出来事だったが、**歴史を根源的に問い直す機会**を沖縄社会にもう一度与えたいと考えたい」(沖縄タイムス:10.7より引用)。

ここで、**伊佐眞一氏**の見解も紹介しておこう(沖縄タイムス:12.16より引用)。

「近代以降の沖縄の歴史をたどると、苦境に陥ると政府への陳情、請願の繰り返し。
自分で困難を克服する力の訓練や蓄積がされていないのが、沖縄の弱点。
「首里城再建は、沖縄が自立の力をつけるチャンス」。



この伊佐氏の指摘は、これからの沖縄を考えていく上で避けて通れない課題である。

沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎